

財団法人松江市教育文化振興事業団
埋蔵文化財課年報 XIII

平成20年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

城下町遺跡（米子町47番地外・南田町52-7番地外）

〔所在地〕 松江市米子町47番地外

（ヤマサキフルーツ店前）

松江市南田町52-7番地外

（物部米穀店前）調査1区、調査2区

〔調査原因〕 都市計画県道城北・北公園線拡幅予定（通称大手前通り）

〔調査区の設定〕 調査区は、店舗前の歩道内にあることから、最小限度の方形範囲を設定し、四方の壁は安全勾配に配慮して掘下げた。江戸時代の屋敷境と考えられる場所及び前調査でウラジオ敷詰め遺構が検出された隣接地を調査対象とした。南田町は調査1、2区と2箇所を設定、内調査2区は二分割して調査を行った。

〔調査面積／期間〕

米子町47番地外 7.5㎡

南田町52-7番地外（東寄り）調査1区 9㎡

南田町52-7番地外（西寄り）調査2区 30㎡

平成21年2月中旬～平成21年3月中旬

〔調査地の歴史〕

松江市旧市街地は、1607年からの松江城築城に伴い城下町として造成された区域で、江戸時代以前には、湿地帯が広がっていたとされている。調査区である米子町、南田町は、城山北公園線沿いで、江戸時代には町屋及び500石以下の武家屋敷があったとされている。江戸中期の資料から、米子川を境に、東側に位置する区域の南北道路は、東西道路より広く、武家屋敷の玄関口は南北道路に面している。

米子町の町名由来は、松江城築城の際に伯耆国米子から移住した職人が居住したことによるとされている。調査区は、遺跡名「米子町47番地外」で、江戸期の絵図面から町屋と武家屋敷の境と想定される場所である。文献資料から江戸中期の東西道路の幅員は、2間4尺（5.1m）で溝は無いとされている。

南田町は、米子町の東側に位置しており、町境の一部は南北を走る国道431号線である。この付近は、武家屋敷が建ち並んでいたようである。調査区は、遺跡名「南田町52-7番地外」で、国道431号線と市道南田南北線に挟まれた区域で、東側区を調査1区、西側区を調査2区の2箇所とした。調査1区は、武家屋敷の境と考えられる場所、調査2区は、平成19年度の本調査でウラジオ敷詰め遺構が検出された隣接地である。江戸中期の東西道路の幅員は、屋敷境の東側は2間3尺（4.8m）で溝は南側のみに3尺（0.9m）、西側は1間5尺（3.45m）で、溝は南北両側に4尺（1.2m）となっている。

以下、遺跡ごとに報告する。

〔米子町47番地外〕

* 調査の概要

調査区は、現ヤマサキフルーツ店の北側部で、区画は現宅地境の南北に伸びる側溝をまたぐ、東西3m×南北2.5mの方形に設定した。結果は、最近まで使用されていた側溝の掘り上げを行い、さらに污水管2本、水道管1本の間を重機による深掘り掘削を行い、調査を終えた。重機掘削穴は湧水が多く、掘削直後から壁面の崩落があり、写真記録に留めるものとした。遺構としては、ゴミ穴、石の並びを検出した。



*遺構

・側溝 調査区のアスファルトを剥がし真砂土内を掘下げると、南北方向の来待石の列が検出された。石列は、2本の胴木（一部上部に面を作る丸太）に据えられており、最近まで使われていた側溝の東側壁である。側溝内からは数本の杭が検出されたが、西側壁の石列は調査区外と想定される。側溝内にはヘドロ状黒色土層が堆積しており、この黒色土層は胴木の設置面レベルからの堆積を示していた。この黒色土層底部には平たい石等が点在しており敷石風に見受けられた。黒色土層内の遺物は、ガラス片が見つかり、いる。胴木の下面へピンポール刺突を行ったが、障害物（石）はなく、造成土と考えられる土層が層順を成していた。米子町民の聞き取り調査から、「この側溝は、今でこそ幅1m弱だが、戦後には1m以上あったと記憶している、いつの間にか現在のように狭くなった。」とのことであった。

・ゴミ穴 側溝を撤去した後、排水管の間を重機による掘削を行った。標高54cm地点でゴミ穴の底部と思われる黒褐色土層が検出された。この土層の中から肥前陶器（砂目積み）が出土している。

・石列 ゴミ穴のさらに下層、標高35cmから大海崎石と思われる石が3個南北に並んでいるのが検出された。

「南田町52-7番地外 調査1区」

*調査の概要

調査区は、物部米穀店の南側、南北の現側溝の西側に位置し、区画は東西3m×南北3mの方形に設定して調査を行った。調査区南側に近現代のトイレが発見されたので、それを避け北側に重機掘削を行った。結果は北壁の土層観察を行うことが出来た。遺構としては、ゴミ穴？、溝？を検出した。

*遺構

・ゴミ穴？ 重機掘削穴の北壁土層の観察から、標高0.3～0.5m付近で、木片が混入する湾曲した黒褐色土層（有機物堆積層）が確認された。

・溝？ 路面より1.9m掘下げた標高0.08mで自然堆積層への掘り込みラインが確認された。掘り込みの深さは約70cmを測る。

「南田町52-7番地外 調査2区」

*調査の概要

調査区は、物部米穀店正面玄関の南側に位置しており来客・車の出入り等を考慮して、全区画・東西10m×南北3mの方形として、東西を2分割して設定した。調査は東側区から行った。

東側区（東西5m×南北3m）では、北側隣接地はすでにマンホール設置で掘削されていたことから、北縁から南側へ80cmほど余地を残し、掘下げていった。東端部より西側5～6mの地点には、水道管が埋設されているということから、この間は掘下げを行わなかった。最終面のゴミ土層（木片等が混じる土層）を精査する予定だったが、北側壁面に亀裂が入り、崩落の恐れが生じたことから、ゴミ層を一部重機掘削して終了した。遺構は、杭列、ゴミ穴、横木（枝木）、ゴミ層、自然堆積層への掘り込みプランを検出した。

西側区では、ゴミ土層、自然堆積層の確認を行って終了した。遺構はゴミ穴、礫敷詰め面、ゴミ層、ウラジロ敷詰め面を検出した。

*東側調査区

・ゴミ穴下層 路面から80cm掘下げたところから3箇所のゴミ穴が検出された。掘下げを進めると5本の木杭、1本の竹杭が検出された。この杭は東西に並んでいるように見受けられた。ゴミ穴には明青灰色シルト質土が埋められており、これらを取り除くとさらに黒っぽいゴミ穴下層が現れた。さらに掘下げると直径5～10cm×長さ3.7m以上の木が東西に横たえてあるのが検出された。この木の検出高は、東端部の標高0.12m、西端部の標高0.5mを測り、西側に高くなっている。なおこの木は、丸太1本で一箇所屈曲

している。

・ゴミ土層 上記の遺構をすべて取り除くと、ゴミ土層（有機物堆積層）が床一面に広がっているのが検出された。この層の中には、陶磁器片、木切れ・箸・下駄等の木製品、木片が出土している。なおこのゴミ層の下層にゴミ層と同色の土層（遺物混入なし）が確認され、さらにその下層に自然堆積層の砂層が検出された。これは排水を兼ねた溝トレンチで確認した。ここまで掘下げた段階で、北壁に亀裂が生じたことから、このゴミ層の精査は断念して、一部重機でこのゴミ層を掘り上げた。西側端部に、遺物なしの同色土層の掘り込みプランが検出された。この掘り込みプランは、西側に湾曲するのが確認された。

・自然堆積層 標高0.2mで自然堆積の灰色砂質層が検出された。

*西側調査区

・横木 東側で検出された東西にのびた横木は、この西側部では検出できなかった。

・礫敷き面 路面より0.95m下がったところ（標高88cm）で礫の散在面を検出した。これは土層断面図橙色土の上層に位置するものである。なおこの土層は、固く締まっており、直上に厚約1cmの砂層が広がっていた。

・ゴミ土層 東側区で検出されたゴミ土層が西側区でも検出されている。これは両区に広がるゴミ土層で、3×10mの調査区の南西側から北東側に緩やかに傾斜しているのが確認された。陶磁器、下駄・塗椀・櫛・箸等木製品が出土している。

・ウラジロ敷詰め ゴミ土層をさらに掘下げると、標高38～25cm付近からウラジロの敷詰め面が検出された。ウラジロは厚み2～10cmを測り西側区全面に敷詰めてあった。このウラジロ層の直下にはやや褐色の土層がある。

・自然堆積層 標高20cmで自然堆積層の灰色砂層が検出された。全面に灰色砂層を検出したが、ここでは更なる掘り込みは確認できなかった。

*遺物

陶磁器、木製品、カワラケ、瓦片、木製品、動植物遺存体等で、現在精査中である。

[まとめ]

「米子町47番地外」 南北に作られた側溝に関しては、現在も使われており、その底部に伴うヘドロ状黒色土の中から板状スリガラス片が出土している。胴木の下層からは、かさ上げ等を行いながら溝として使い続けた様相は見られなかった。最終段階で、重機掘削によりゴミ穴底部と考えられる黒褐色層が検出され、その中から肥前陶器（砂目積み）が出土している。このゴミ穴のさらに下層から、大海崎石が検出されていることから、江戸初期における石の遺構と考えられるがその性格は不明である。

「南田町52-7番地外 調査1区」 土層観察を目的として重機掘削を行った。その結果自然堆積層をさらに掘込んだラインを検出した。この掘込みは、「ゴミ穴」、「屋敷境の溝状遺構」等考えられるが定かではない。

「南田町52-7番地外 調査2区」 東西2区画に分割して調査を行った。両区の間には水道管がありこの部分は掘下げなかった。両区の共通土層としては、遺物・木片が混入するゴミ土層と、自然堆積砂層である。東側区標高88cmで検出の砂層が乗る固化面は、西側では上層からの掘込みによって確認できなかった。この土層からは、礫敷きが検出され、この土層面を生活面として判断した。時期は不明である。なおゴミ土層は調査区南西コーナーから北東コーナーにかけて緩やかに傾斜をしているようである。この土層に関しては、調査区全体に広がることから10m以上のゴミ穴もしくは道路に沿った帯状のごみ捨て場（素掘りの側溝）等が考えられる。

街中での狭い範囲という条件の中での調査ゆえ、大きな成果は期待できないものの、各調査区の遺構・遺物・土層を検証して、今後の新たな解明につなげていきたい。（柚原恒平）



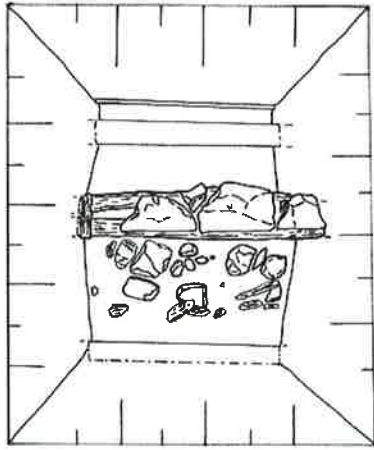
調査区 近景 西北側から



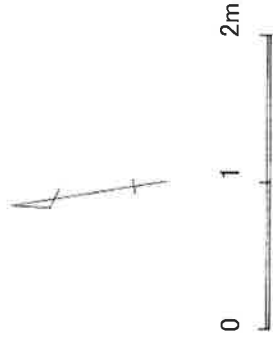
俯瞰写真 南側から



来待石と胴木、溝底面の石敷き検出 西側から



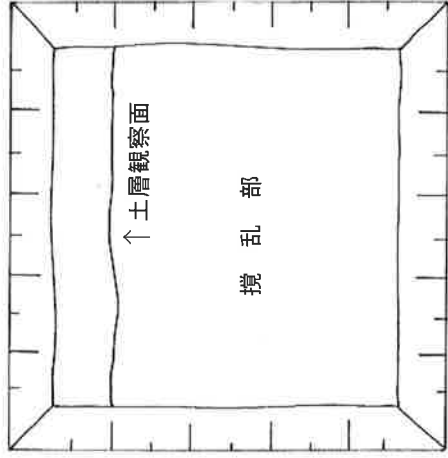
米子町47番地外 遺構平面図



調査区近景 東南側から



攪乱状況 北西側から



南田町52-7番地外 調査1区平面図



石列・胴木、底部 北側から



溝底掘下げ 西側から



重機による掘込み 東側から



自然堆積層への掘込み



重機掘削による土層観察



西側01



東側01



東側02



東側03



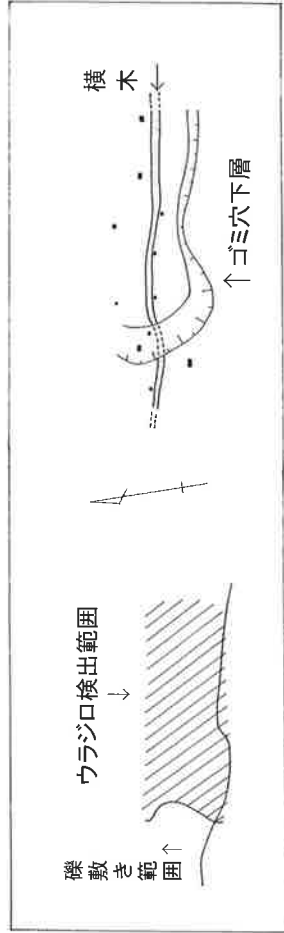
西側02



西側03



西側04



南田町57-2番地外 調査2区

- 西側01 = 礫層面検出状況 南側から
- 西側02 = 遺物出土状況(ゴミ層内)
- 西側03 = ウラジロ面検出 東側から
- 西側04 = ウラジロ敷き詰め状況
- 東側01 = 北壁土層
- 東側02 = ゴミ穴下層部 南側から
- 東側03 = 横木検出 南側から
- 東側04 = 横木敷設状況 東側から
- 東側05 = 横木脇の竹杭検出状況 東側から

城下町遺跡（母衣町40番地外）

〔所在地〕 松江市母衣町40番地・殿町345番地

〔調査原因〕 都市計画県道城北・北公園線拡幅予定（通称大手前通り）

〔調査区の設定〕 調査区は、地形・周囲の建造物等状況を考慮の上、国土座標に準拠して調査予定地全体に一辺5.0mの方眼を設定した。実際の調査は、西側調査区・中央調査区・東側調査区に分け、西側調査区→東側調査区→中央調査区の順に行った。

〔調査面積／期間〕

300.45㎡／平成20年9月1日～平成21年3月18日

〔調査地の歴史〕

調査地を絵図でみると、武家地であり、堀尾期には西から（以下同様）下方又丞・野村孫太郎（1620～1633）、京極期には赤林左エ門・塩津左近右エ門（年代不詳）、松平期には柳多波（江）・黒川又（左衛門）（1825～1851）の屋敷地であったことがわかる。

文久元年（1861）頃の御城下絵図と明治6年（1873）の「松江市街二分間図」比較すると、かなり屋敷地の分筆化が進み町家への移行が窺える。特に、西側（殿町）は東側（母衣町）に比べて細分化されていることがわかる。その後、明治41年（1908）の松江市街地図や戦前の地図によれば、母衣町には憲兵分隊が置かれている。現在も敷地境界に「陸軍用地」と彫りこまれた標柱がある。戦後は行政監察事務所（後、行政監察局→行政評価事務所）として利用されていた。

〔発掘調査の概要〕

調査は、厚さ50～70cmの表土層を重機で除去し、その下は手掘りを原則としながらも必要に応じて重機を使用した。確認し得た生活面は3面あった。上から順に、第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面と呼んだ。

〔検出遺構〕

第1遺構面（1.5m前後）

幕末から明治以降の遺構（民家や松江憲兵分隊関係）が混在する面である。検出された遺構には、水路跡・土坑状遺構・建物礎石・建物基礎・埋設桶・柱・杭があった。

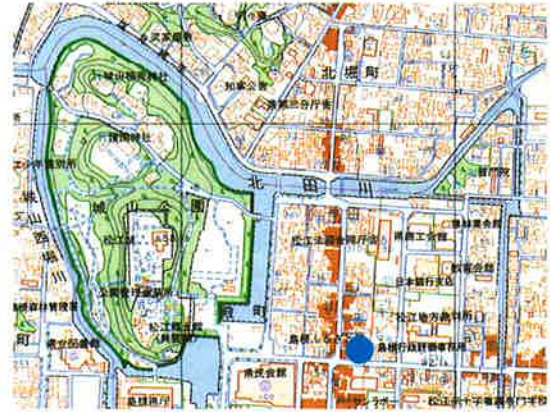
土坑状遺構のうち、SK20は、径1.1m前後、深さ0.2m前後を測る。多量の陶磁器片が出土したが近代のものが多く混じっていた。

建物礎石は、建物を復元するに至らなかった。西側調査区では、東西南北に並ぶ礎石を認めることができた。幕末のものと推定できるが、近代になっても利用していることが判明した。これらの礎石の上に平らな石をのせ高さを調節してセメントで固定しているのである。また、松江憲兵分隊に関するものと推定される建物基礎が検出された。浅い溝を掘り、人頭大前後の割石を敷きつめてその上に松丸太を敷き、さらにその上にレンガを並べ固定するという丁寧なものであった。

埋設桶は、西側調査区で4、中央調査区で1検出した。西側調査区のは厠として利用したもので、南北に二つの桶が並べて埋設してあった。それぞれの桶が二段重なって検出された。当初の桶が傷んだので新しい桶を重ねて使ったと考えられる。上部の桶から播鉢片が出土している。須佐系のもので18c.半ばのものである。

第2遺構面（1.2～1.4m前後）

17世紀第2四半期以降の遺物が出土する。検出した遺構には、土坑状遺構・水路（SX11）・壁状遺構・厠跡がある。東側調査区では、礫敷き面と第3遺構面から築かれた石組の上面が検出されたが、他に顕著



な遺構を検出することができなかった。

土坑状遺構のうちSK11は、一辺2 m前後、深さ0.5 m前後の規模をもつ排滓土坑で、陶磁器片・木器（漆器も含む）・木片・食物残滓が出土した。陶磁器片には、肥前系陶器（砂目）・古伊万里片・土師質土器（在地系）がある。

水路（SX11）は、平面L字形を呈し、西側調査区から中央調査区につながるものと推定できる。雨落溝かとも思われるが、主体となる建物跡を検出していない。

壁状遺構は、径1～2 cm前後の竹をほぼ等間隔に東西方向に並べたもので、横方向に渡した竹もある。土壁の木舞ごとき様相を呈している。

厠跡は、東西に並べられた二つの埋設桶で、タガしか残っていなかった。平面長円形の土坑を穿ってから桶を設置したものである。東側の桶は土坑の切り合い状況から西側のものより後に設置されたことがわかる。前述の壁状遺構は厠遺構に伴うものと思われる。

第3遺構面（1.1～1.2m前後）

17世紀第1四半期の遺物出土する。検出した遺構には、土坑状遺構・溝状遺構・横転壁状遺構・土留遺構・建物土台・石組遺構がある。

土坑状遺構のうちSK21は、北側部分が調査区外にあり東側が崩落の恐れがあったため、全掘できなかった。発掘し得た上端の東西幅5.8 m、深さ1.5 mを測る。底部から肥前系陶器大皿・土師質土器皿（京都系）・木器（漆器を含む）が出土している。後述する石組より後出か同時期のものである。

溝状遺構SD04としたものは、南北にとおるのもので、上端の幅4.9 m前後、深さ1.5 m前後を測る。出土遺物には、肥前系陶器片・中国青花片・土師質土器片（京都系）・木器片等がある。部分的な発掘であり溝と断定しにくい面もあるが、土層堆積状況を見ると水流によると思われる堆積があること、溝がかなり埋まった段階（同一断面土層の上部）でも溝状の落ち込みがみられる、等の理由で屋敷境の水路と考えている。

土留遺構は、木杭と竹を利用したもので調査区南側に構築され、東西約19 mの範囲で検出した。北側には土盛り整地して平坦面を造成している。造成面の土が流出しないようにしたものである。南側はこの遺構を境にして南に傾斜した堆積土層がみられ、水路があったと思われる。松江開府当時の屋敷地の南端となる。

建物土台は、土留遺構の直上に設置された角材で、柱用と思われる柄穴が穿たれている。土留遺構の西端から約11 mの範囲で確認されたが、この土台に伴う他の遺構は検出していない。門長屋のようなものの存在も考えられるが、断定できない。

石組遺構は、土留遺構の延長部分から約0.7 m北に寄ったところに築かれた高さ0.7～0.8 mの低い石垣状のものである。この石組の南側に、石組上面の高さまでトレンチ掘りをしたところ、石組の表面（南側）から約3.4 m離れた部分で石組が存在することを確認した。この石組の上面に梁間二間の門長屋が存在したと推定できる。

SK21・SK23・SD03・SD04等の遺構は、上面にシダ類を敷きつめた自然堆積層上面から掘りこんでいる。また、石組遺構もこの自然堆積層の上面に築いている。自然堆積層の上に0.4 m前後の盛土をして、実際の生活面を形成しているといえよう。シダ類は地盤の沈下を防ぐために敷きつめられたのではなからうか。

[小 結]

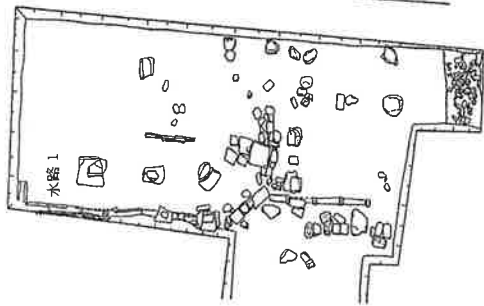
概略、三遺構面に分けて記述したが、概ね次のとおりであった。第1遺構面は、幕末から明治期の遺構を主体とし、現代の攪乱層も多くみられた。第2遺構面は、17世紀第2四半期頃以降のもので、換言すると松平入府前後のものと思われる。第3遺構面は、17世紀第1四半期頃のもので、松江開府当時の様子を示している。

松江開府当時の屋敷割の一端が明らかになった。土留遺構の存在により屋敷地の南端が明らかになり、また、SD04が溝状遺構という前提つきであるが、東西両屋敷境の可能性が示された点は大きな成果といえよう。

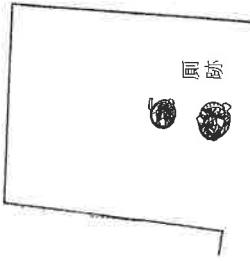
（石井 悠）

松江城下町遺跡母衣町40番地外 第1遺構面

西側調査区

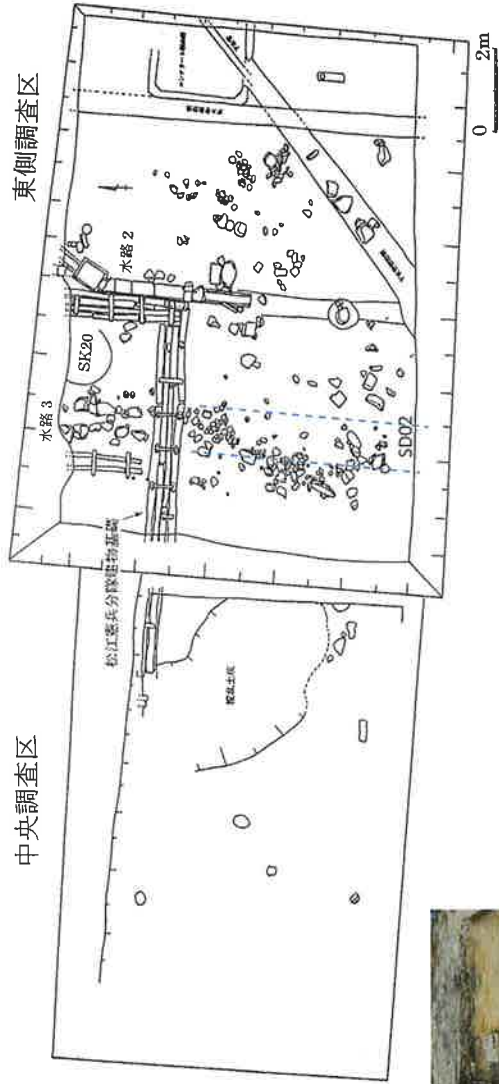


上図の上面を少し掘り下げた面



埋設桶 厕所(北から)
(上の写真の面を少し掘り下げた面)

中央調査区



西側調査区遺構検出状況
(南から)



西側調査区遺構検出状況(北から)
(上の写真の面を少し掘り下げた面)



東側調査区遺構検出状況(東から)
(松丸太直下の松江藩兵分隊建物基礎)



東側調査区遺構検出状況(北から)
(根石を取り上げた後の状況)



東側調査区遺構検出状況(北から)
(松丸太直下の根石検出状況)



東側調査区遺構検出状況(北から)
水路跡3とSD02
(北から)



SK20 遺物出土状況(南から)



磁器碗(肥前系)



磁器茶碗蓋(肥前系)



磁器碗(瀬戸・美濃)



陶器八角皿(在地系)



陶器茶碗蓋(在地系)



SD02内西側から検出された埋設桶

松江城下町遺跡母衣町40番地外 第2遺構面



西側調査区 SX11 (東から)

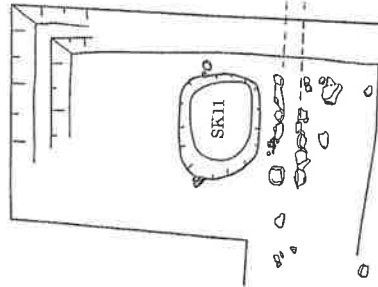


中央調査区 SX11 (南から)

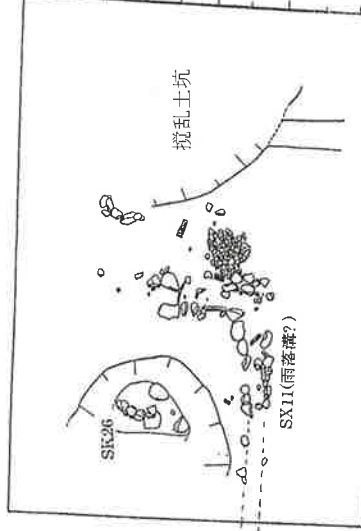


東側調査区 (東から)

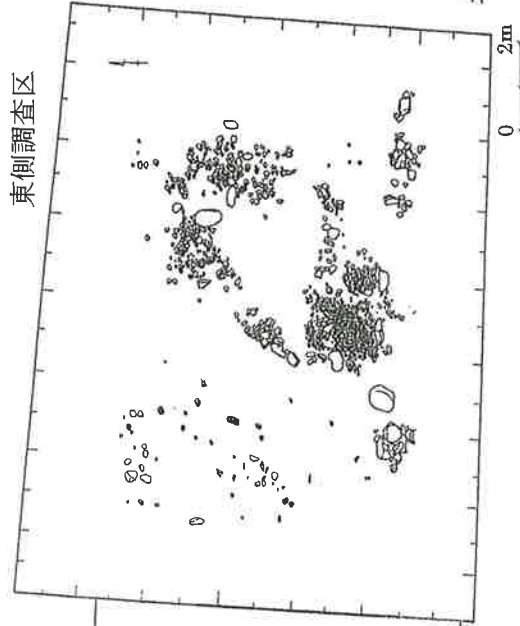
西側調査区



中央調査区



東側調査区



上図の上面を少し掘り下げた面



SK11遺物出土状況 (南から)



廁跡 (南から)



SK26 (東から)



陶器大皿 (肥前系)



陶器皿 (肥前系) 陶器小杯 (肥前系)



磁器碗 (肥前系) 磁器蓋 (肥前系)



土師質土器皿 (在地系) 煙管

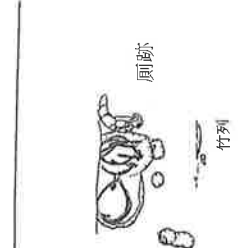
SK11 出土遺物



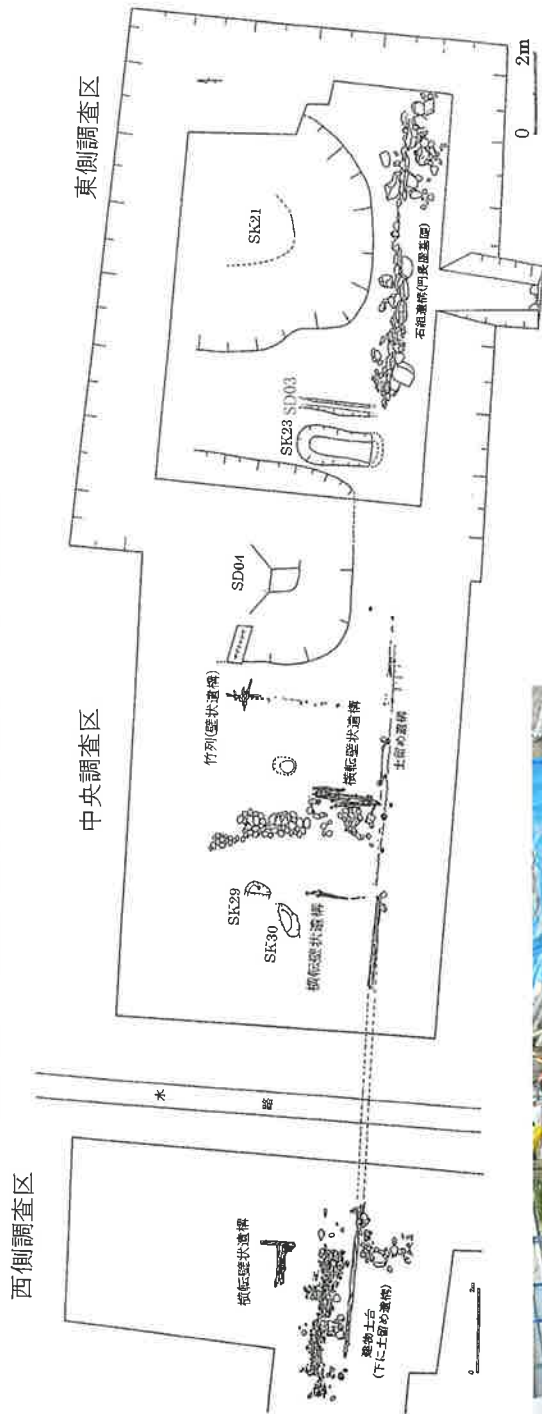
陶器碗 (肥前系) 土師質土器皿 (在地系)



土師質土器皿 (在地系) 寛永通宝 SX11 出土遺物



松江城下町遺跡母衣町40番地外 第3遺構面



SK21堆積土層(東から)



SK21遺物出土状況(東から)



SK21(破線部分)と石組遺構(北から)



石組遺構とSK21(破線部分)
(北東から)



SK23とSD03(南から)



SD04 堆積土層(南から)



敷き詰められたシダ類(南から)

中央調査区



両調査区に続く建物土台跡 左は中央調査区、右は西側調査区(北から)



建物土台跡(北から)



建物土台取上げ後の土留遺構(北から)



建物土台(西から) 西側調査区



陶器碗(肥前系) 土師質土器皿



陶器皿(肥前系)

磁器碗(中国青花) 漆器碗

SK21 出土遺物



陶器皿(肥前系)

磁器碗(中国青花)

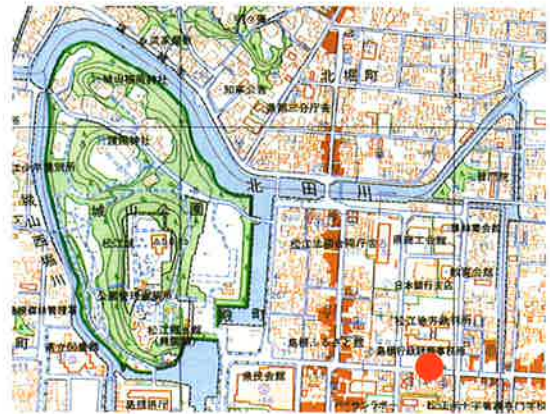
SD04 出土遺物

城下町遺跡（母衣町68番地 調査2区・調査3区）

〔所在地〕 松江市母衣町68番地（広島高等裁判所松江支部）

〔調査原因〕 都市計画県道城山北公園線拡幅予定（通称大手前通り）

〔調査区の設定〕 調査区は、裁判所正面敷地という立地条件を考慮し、前庭東部を調査1区（平成19年度調査済）、前庭西部を調査2区、正面玄関部を調査3区に設定し、平成20年度に「調査2区」及び「調査3区」の発掘調査を行った。



〔調査面積／期間〕

調査2区 304㎡／平成20年3月中旬～平成20年6月下旬

調査3区 360㎡／平成20年5月初旬～平成20年9月下旬

〔調査地の歴史〕

松江市旧市街地は、1607年からの松江城築城に伴い城下町として造成された区域で、江戸時代以前には、湿地帯が広がっていたとされている。江戸時代ここ母衣町は、西隣の殿町と共に城郭内を意味する「内山下¹」と呼ばれ、武家屋敷が整然と建ち並んでいたようである。

堀尾期絵図	松平期絵図
元和6年(1620)～寛永10年(1633)	文政3年(1825)～嘉永4年(1851)
大手前側出入口	大手前側出入口

堀尾期絵図			
武元左平太	500石	西側地	寛永10年(1633)頃
落合半左衛門	300石	東側地	
松平期絵図			
熊谷主殿	250石	西側地	文政2年(1819)家督相続～嘉永7年(1854)没
速水孫一	100石	東側地	文化8年(1811)家督相続～天保6年(1835)没
織太	100石		天保6年(1835)家督相続～明治元年(1868)

〔調査2区の概要〕

調査2区は、堀尾期絵図から武元氏500石、松平期絵図から熊谷氏250石の武家屋敷が建っていたとされている。明治23年、現在の広島高等裁判所松江支部の前身「松江始審裁判所（明治15年改称）」がここに新築移転した。明治元年からこの間、武家屋敷は少しずつ切り売りされている²ようで、最終的には裁判所管理地となったものである。調査区は、重機置き場・ノッチタンク（排水時の汚泥沈殿装置）・廃土置き場等の確保を行い、東西に長い区画を設定した。調査区周縁には土層観察面を兼ね備えた排水溝を巡らし、壁面の土層観察を行いながら掘り下げていった。調査前に調査区内（裁判所庭）の立ち木の移植が行われたことから場所によっては表土下80cmまで攪乱を受けた。最終廃土は重機から土運搬車に直接乗せるという方法を取り、調査範囲を最大限に広げ調査を行った。

遺構としては明治の井戸、幕末から明治にかけての瓦溜まり、江戸時代後期と考えられる石組遺構、江戸時代前期と考えられる柱穴群（建物跡?）、ウラジロ（羊歯植物の一種）が貼り付けられた方形土坑、ゴミ穴などが検出された。

遺構面は2面の検出と考えられ、江戸初期の遺構検出面は標高60～70cm台に、幕末から明治と考えられる検出面は標高約1～1.4mを測る。その間は無遺物の盛り土で占められている。

遺物は日常用の陶磁器類が大多数を占め、その大半が18世紀後半のものである。検出標高が低い遺構からは、時期判定できる遺物が無いものの、一部の土坑からは砂目肥前陶器が出土している。

「遺構」

1) 標高1 m以上あるいは1 m付近より検出された遺構

*石組井戸 東端部に位置する井戸は、表土下30cmより厚15cmのコンクリートの蓋で覆われた状況で出土している。直径1 m、深さ2.5mを測り、来待石も含め近隣の安山岩で作られている。井戸内の遺物はすべて近代の遺物であった。なお明治初期の裁判所絵図面内正面玄関脇に書き込まれている井戸がこの井戸と考えられる。

*掘抜き井戸 直径約20cm、深さ2.4mを測る筒状の穴を西側部の瓦溜まり上部に検出した。穴上部は瓦片を重ね筒状に仕立てられている。幕末以降と考えられる。

*瓦溜まり1・2 西側部に2ヶ所の瓦の溜まりが検出された。瓦は大半が棧瓦である。瓦片内にある遺物からさほど時期差はなく、いずれも幕末と考えられる。瓦は総重量約2トンを量り、概ね棧瓦1枚が2.3kgとすると約900枚分となる。なお瓦溜まりの底部から俵土のうが出土している。

*石組遺構 中央西寄りに位置しており、標高90cmでの検出である。東西3.7m×南北2.7mの掘り方に内径1.9m×1.2mの長方形の石組を作る。「裏込め」には奥行約20cm幅で砂利が詰め込まれている。底部にも砂利が敷き詰めてある。底部の砂利を取り除くと直径約1.1m 深さ0.2mの砂が入った円形の掘り方が検出された。この砂の円形土坑を壊して上部の石組を形成している。石組間には松葉が入れられていた。2区検出の石組は、1区検出の石組遺構(内径2.7m×1.9m)より小さいものの形態的に極めて類似している。また北東側にある垂直に掘込まれた土坑へも切り込んでいます。

2) 標高70cm前後あるいはそれ以下より検出された遺構

*方形土坑1 調査区西端部に位置し、掘り方は北側・西側の未調査区へと続いている。東西3.4m以上×南北3.3m以上×深さ1.5mを測る。土坑内面には、ウラジロが貼り付けられるように巡り、厚10cm前後を測る。一部葎と思われる植物も含まれている。

*方形土坑2 調査区中央西寄りに位置し、東西5.1m×南北3.6m×深さ1.8mを測る。土坑内にはウラジロが折り重なるように入れられている。

*方形土坑3 調査区中央東寄りに位置し、東西4.1m×南北1.5m×深さ0.8mを測る。南側未調査区へと続いている。底部付近にごみ層があり、カワラケ・貝類が出土している。

*方形土坑4 調査区北側東寄りに位置し、東西1.9m×南北1.3m×深さ約0.2mを測る。この土坑からは砂目肥前陶器・カワラケ等が出土している。

*方形土坑5 調査区東寄りに位置し、東西4.9m×南北3.1m×深さ約1.7mを測る。この土坑内面からは藁?、木切れ・薄板が出土している。

*柱穴群 調査区中央付近に位置し、南北に直線的に黒色土の盛り上がりを検出した後に、黒色土内より木柱・柱穴を検出した。この木柱列の東側に数ヶ所の柱穴を確認した。建物の可能性がある。

*その他土坑 その他の土坑として十数ヶ所検出しているが、大半が瓦溜まりの上部に位置していることから幕末から明治にかけての土坑と考えられる。

*礎石? 北側側溝内から大型の石が3ヶ所検出された。いずれも標高0.2m付近からの検出である。礎石として北側に建物が広がるかどうかは、不明である。

「まとめ」

今回の調査において、現段階ではおおまかに江戸初期と江戸末期の遺構に大別できることとなり、これは、前回調査した1区(裁判所東前庭)の江戸末のゴミ穴・石組遺構・井戸等と江戸初期の带状落込み遺構の検出と同様な遺構検出結果となった。

*石組遺構について 掘り方・裏込めの砂利の残存高から考えると、掘込み上面まで石積み成されてきたものと考えられ、深さ1 m以上の深い石組遺構と想定される。石は転用を目的で埋め戻し時に抜かれ

たものか。裏込め砂利・石組内松葉は、土中からわき出す水の浄化装置と考えるのが妥当であろうか。もともと井戸があった場所に方形土坑を掘り、長方形に石を組み湧水を貯める機能を持たせたと考えられる。

主な遺構の検出状況一覧表

遺構名	表土 標高2.0m			備 考
	検出標高	底部標高	深さ	
石組井戸	1.7m	-0.8m	2.5m	明治当初 裁判所絵図面に記載 裁判所の井戸?
掘抜き井戸	1.16m	-1.24m	2.39m	明治以降 瓦片を使い上部を筒状に組み上げる
瓦溜り 1	1.01m	0.6m	0.41m	幕末から明治 底部より俵土のう検出 掘り方は検出面より高い可能性有り
瓦溜り 2	1.07m	0.3m	0.77m	
石組遺構	0.9m	-0.27m	1.17m	幕末
土坑 1	0.2m	-1.28m	1.48m	江戸初期 方形土坑 ウラジロ敷詰め
土坑 2	0.73m	-1.13m	1.86m	江戸初期 方形土坑 ウラジロ敷詰め
土坑 3	0.65m	-0.18m	0.83m	江戸初期 ゴミ穴 砂目肥前陶器 掘り方は検出面より高い可能性有り
土坑 4	0.66m	0.44m	0.22m	江戸初期 貝類、木製品ほか
土坑 5	0.70m	-0.99m	1.69m	江戸初期 木切れ、薄板、藁?
黒褐色粘質土 (通称チョコレート層 自然堆積層と考える)				標高0.3m

*ウラジロ敷詰め方形土坑 ウラジロを敷くという行為は、近年まで農耕地改良に伴う暗渠として使われているようで、何らかの目的で掘込まれた方形土坑の湧水対策として敷き詰められ、埋め戻されたものであろうか。

*土坑の性格 方形土坑は、平面プランが道路区画に沿っており、自然堆積層まで掘込んでいるという特徴を持つものの土坑自体の目的は不明である。土坑は、底部に有機物(木屑・藁等)が堆積しているもの、生ゴミと思われる貝殻等が混入しているものがあり、「意識したもの」を廃棄したという雰囲気をもっている。またこれらの堆積が全く無い土坑もある。

*自然堆積層 標高0.1m付近に明灰色砂層は自然堆積と確定したが、その直上標高0.3mにある黒褐色粘質土層(通称チョコレート層)に関しては、「自然堆積」か「人為的盛り土」かは、意見が分かれるところであるが、ここでは自然堆積層とした。また、明灰色砂層の直下には暗灰色粘質土層があるが、場所により、これらの層の逆転や混ざり合いの層が確認された。これは自然堆積層を掘込んだ時に発生した攪乱土と考えられる。

*柱穴群 堀と建物の可能性が高く、更なる検証が必要である。

*遺構の位置と状況 江戸初期の土坑の掘り方、柱穴群の方向は南北方向もしくは東西方向に平行しており現在の道路方向に比定するものである。城下町遺跡の発掘はまだまだ不明な点が多い。今後これらの調査を積み重ねにより、松江城下町および城下町以前の古環境が解明されることを期待しつつまとめたい。

註1 「内山下」とは一般的に「城郭内」という意味をもつ

註2 松江市街二分間図(明治6年)より

参考文献

大手前通りの歴史を調べる会「大手前通りの歴史を調べる会調査結果報告書」2004年3月

江戸遺跡研究会編「図説江戸考古学研究辞典」2001年4月 柏書房

九州近世陶磁学会「九州陶磁編年」2000年2月

(柚原恒平)



方形土坑5 東側から



方形土坑3 北側から



方形土坑2 ウラジロ 東側から



瓦溜り1 北側から



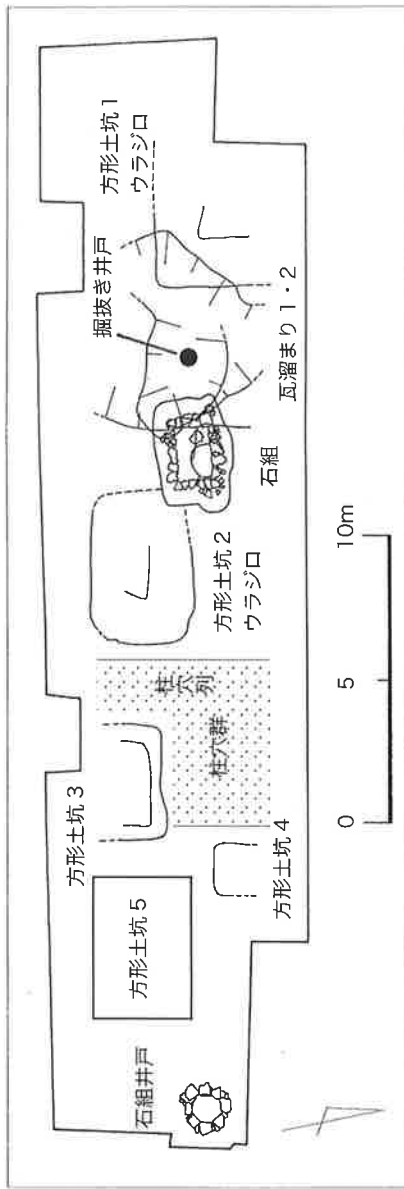
瓦溜り2 北側から



石組井戸



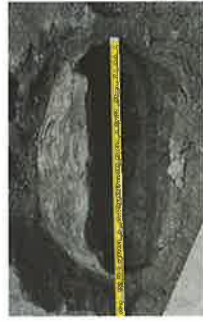
焼き塩壺



松江城下町 母衣町68 調査2区 遺構平面図



掘抜き井戸：右側穴 西側から



俵土のうの検出



石組（左）と石組底部の砂層が入る掘込み痕（右）



方形土坑1 ウラジロ 東側から



柱穴群 北側から

[調査3区の概要]

調査3区は、2区と1区（平成19年度調査）の中間にあたる調査区である。堀尾期絵図から落合氏300石・武元氏500石、松平期絵図から熊谷氏200石・速見氏100石の屋敷地であったことがわかる。明治以降の変遷については、2区同様である。

調査は、重機で表土を剥ぎとり、その後手掘りを原則としながら必要に応じて重機を使用して行った。検出した遺構面は2面あり、上の面を第1遺構面、下の面を第2遺構面とした。

[検出遺構]

第1遺構面（標高1.2m前後）

この面は、幕末から明治以降の遺構が混在する面である。ピット状遺構・土坑状遺構・井戸跡・溝状遺構・明治期の裁判所門跡（以下、門跡）・同掲示場跡が検出された。

ピット状遺構をかなり検出したが、建物跡を確定するに至らなかった。SD01の西側に1棟、東側に1棟存在する可能性も考えられたが、調査区外に延びる可能性があり判然としない。後者は柵列の可能性もある。

土坑状遺構のうち、SK64は南側が調査区外になるので正確な規模は不明であるが、一辺2.6m、深さ0.3mを測る。多くの陶磁器片・木片・瓦片が出土した。陶磁器片のうち古いものには、17c.代の肥前系磁器もあるが、18～19c.代の遺物が中心で意東焼・布志名焼など在地系遺物が含まれる。

井戸跡は、第1遺構面から掘りこまれているが、すでに廃棄され上部はかなりの攪乱をうけていたため、実際には第2遺構面で検出された。当地産出の玄武岩を組んで構築されていた。内径1.4m前後、残存石組の高さ1m前後を測る。調査2区で検出された井戸は明治期の裁判所絵図に描かれていたが、この井戸は描かれていないこと・井戸を組んだ石材の構成がことなること・近現代の遺物は出土していないこと（近世の遺物もなかった）などから、2調査区の井戸より古く幕末に近いものと思われる。

溝状遺構SD01は、溜めます状遺構につながる明治期以降のものと思われる。溝状遺構SD02は、その性格・時代について不明である。

門跡は、明治期の絵図に示された位置で検出された。調査区西側のかなりの部分をしめる。建造物の沈下防止用杭多数とともに門柱の地中埋設部分（角材）や根太部分が検出された。柱の底面には柄が削り出され、根太には柄穴が穿たれていた。

掲示場は、浅い布掘土坑に切石（来待石）を設置し、その上に角材を置いたもので柄穴が穿たれ、柄が嵌った状態で検出された。南側は調査区外に延びていた。

第2遺構面（標高0.6m前後）

この面は、17c.第1～2四半期の生活面にあたる。第1遺構面より50～60cm下にあたる。ピット状遺構・土坑状遺構・溝状遺構・石室・玉砂利敷き等がある。

ピット状遺構には、柱穴と杭の穴がある。底面が平らな柱は5本、柱抜き取り痕のある穴は4穴で計9本の柱跡が確認された。しかし、この調査区内で建物跡を推定することができなかった。SK46は、中央に拳大から人頭大の石が配置され、そのほぼ中央に加工痕のある木片があった。石を取り上げた後の面に隅丸四辺形の落ち込みが認められ20cm程度掘り下げたら、底面に径1～3cmの河原石7個が出土した。

土坑状遺構は、大小さまざまあるが、SX02・SK61・SK63・SK65が特徴的である。

SX02 調査区のほぼ中央西寄りの部分に位置する。西側の一部はSD03が埋まった部分にかかり、東側の一部は井戸で切られている。上端で長さ7.7m前後・幅3m前後・深さ0.75m前後の規模をもつ。排滓土坑と考えられ、陶磁器片・木器片・木片・植物遺体・食物残滓等が出土した。出土陶器類をみると、ほとんどが肥前系陶器と土師質土器皿（京都系・在地系）で志野焼・黒織部も含まれる。また、わずかであるが、中国製青花片も混じる。17c.初頭のものである。

SX61 SX02の東側に位置する。上端で長さ2.5m前後・幅1.6m前後・深さ1.1m前後の規模をもつ。SX02同様排滓土坑である。陶磁器片・土師質土器皿（京都系・在地系）・木器片・鉄器片・木片・植物遺体・食物残滓等が出土した。17c.初頭のものである。

SK63 調査区の東側南端に位置する。大半が調査区外に延びるもので、一辺7mの方形プランをもつものと思われる。調査した部分では深さ0.6mを測る。上層部で土師質土器皿片が出土した。また、土坑斜面にはシダ類（ウラジロ）が貼り付けられたような状態で出土した。

SK65 調査区の西側に位置する。上端で長さ3m前後・幅1.8m前後・深さ0.35m前後の規模をもつ。遺構の性格は不明である。出土遺物は少なく、上層から肥前系陶器皿・土師質土器皿（京都系）が出土している。

溝状遺構（SD03） 調査区の西寄り部分に位置する大溝で、南北に貫流する。江戸初期の屋敷境と推定できる位置に存在する。上端で幅1.7m、深さ0.8mを測る。溝内の最下層上面から土師質土器皿（京都系）が出土した。この層の直上（オモカス層）にはラミナ（水流によってできる層）とも思われる層がある。

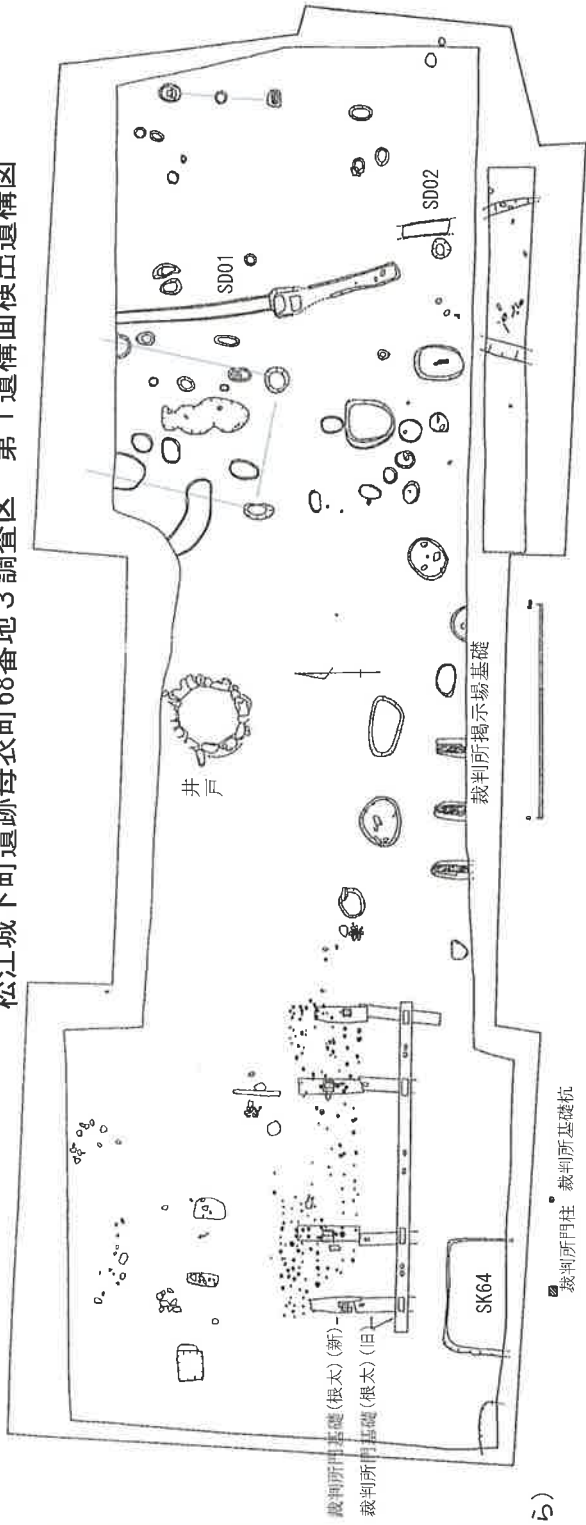
石室（SX02）^{いしむろ} 調査区の西寄り部分SX02とSK65の間に存在する。SD03が埋まった後に掘りこまれ組まれた石組遺構である。石組の上面全体に河原石が敷かれた状態で検出された。石室の内側は長辺1.4m、短辺1mの長方形プランで、深さ1.5mを測る。一抱え以上ある石を主体に組まれたものである。石材は、角閃石安山岩（大海崎石）が中心で他に安山岩・玄武岩が用いられている。石の切り出し時に用いられる「矢」の痕跡を残すものもある。石室内底面には河原石があった。転落したものか、当初から敷かれていたかは不明である。遺構の性格は不明である。陶器（肥前系）・土師質土器皿（在地系）・中国製青花片・木器片・食物残滓等が出土した。17c.第2四半期ころのものである。

玉砂利敷き 調査区東寄り部分の南端に位置する。南北0.95m、東西1mの範囲で検出した。玉砂利が敷き詰められている。東側は玉砂利敷きの端で直線状に揃えられている。この遺構に伴う遺物はないので、時期は不明であるが、以上述べた第2遺構面の角遺構より少し高い位置にある。

[小 結]

さらなる調査と傍証が必要であるが、屋敷境とも思われる溝状遺構や排滓土坑・石室を検出したことは大きな成果であった。溝状遺構検出は松江城下の町並研究に、排滓土坑・石室等出土の遺物は、当時の物資流通や土師質土器皿の編年研究にとって欠くことのできない資料となりそうである。（石井 悠）

松江城下町遺跡母衣町68番地3調査区 第1遺構面検出遺構図



裁判所門基礎根太(旧) (東から)



裁判所門基礎杭 (南から)



SK64 遺物出土状態 (北東から)



第1遺構面調査風景 (東から)



青磁瓶(肥前系)



白磁菜付壺(徳東焼)
SK64 出土遺物



陶器甕(在地系)



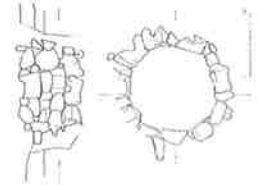
陶器播鉢(在地系)



第1遺構面 (東側部分 北西から)

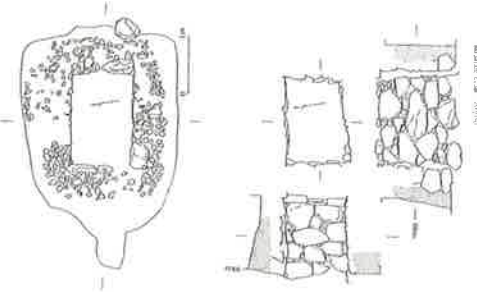
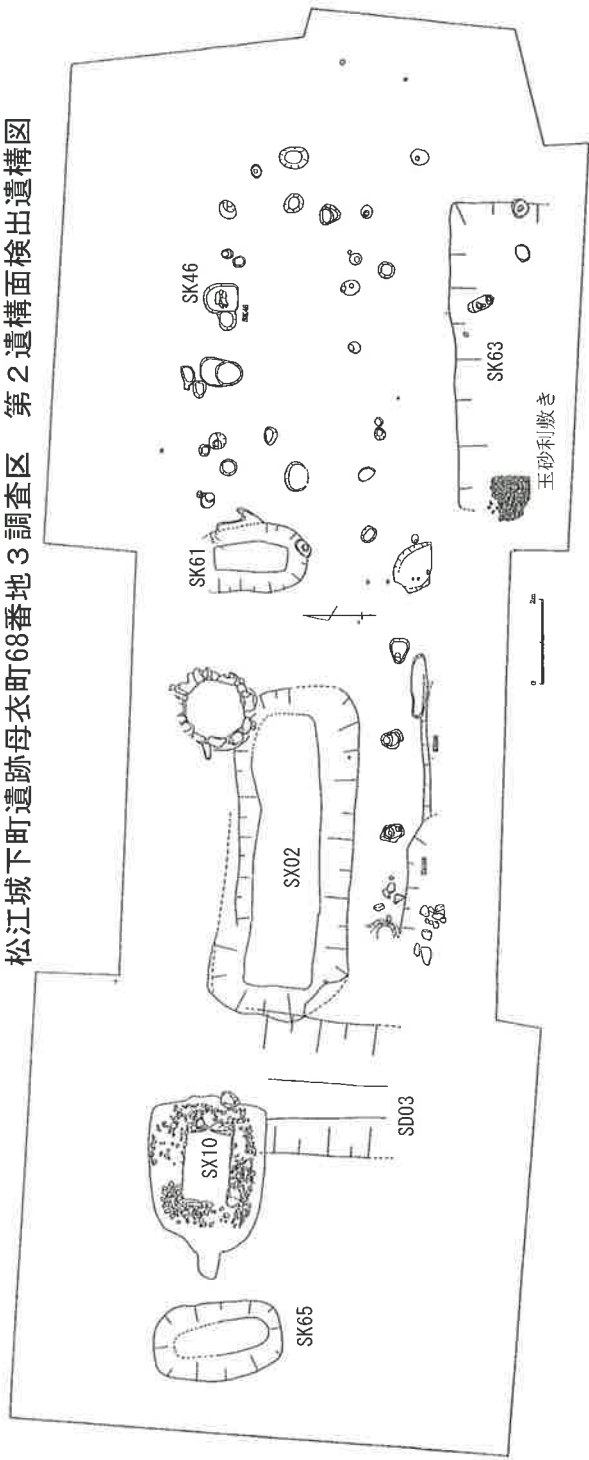


井戸検出状況 (南から)



井戸実測図

松江城下町遺跡母衣町68番地3調査区 第2遺構面検出遺構図



SX10 実測図



SX10 検出状態 (東から)



SD03 検出状態 (南から)



陶器大皿(肥前系)

SX10 出土遺物



陶器碗(肥前系)
陶器碗(黒織部)

SX02 出土遺物



陶器德利
(肥前系)

遺物



SX02 遺物出土状態 手前の石は井戸 (東から)



玉砂利敷き検出状態 (北から)



第2遺構面 検出状態 (東側部分 北西から)



SK61 検出状態 (南から)



SK46 検出状態 (南から)

陶器向付(志野焼)
土師質土器皿
磁器碗(中国青花)

松江城下町遺跡（殿町287番地・279番地外）

【所在地】 松江市殿町287番地・279番地外

【調査原因】 松江市歴史資料館(仮称)整備事業

【調査面積／期間】

3,155㎡／平成19年5月17日～平成20年8月15日

補足調査／平成20年10月1日～11月28日

【調査地の歴史】

旧松江市街地は、1607年からの松江城築城に伴い城下町として造成された区域で、江戸時代以前には、湿地帯が広がっていたとされている。本調査地は、江戸時代を通じて家老屋敷が配置されていたことが絵図面等でわかっており、2～3軒の屋敷地がかかることが想定されることである。文献からは、石高3,000～10,000石をもつ有力な家老が配置されていたことがわかっている。

廃藩置県後の分筆により、屋敷地は切り売りされ、現代に至るまで20軒近くの宅地で分割されている。

【調査の概要】

平成18年度から続いた家老屋敷の調査も今年度で終了となった。調査は、平成20年8月でいったん終了したが、その後のトレンチ調査により、南側の屋敷地で下層にもう1面遺構面があることが判明した。そのため、市文化財課が補足調査を行なった。

その結果、北側の屋敷地は第1～4遺構面、南側の屋敷地は第1～5遺構面まで存在することが判明した。これは、城下町造成当初から幕末までの屋敷地の変遷がわかる貴重な調査例である。また、遺物の組成についても、各遺構面で変遷が追えるようである。

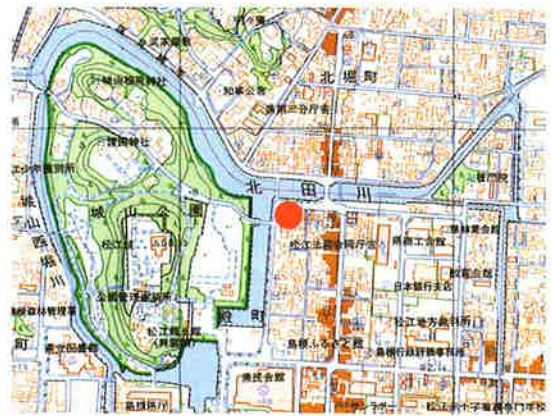
以下、屋敷境から北側を「北屋敷」、南側を「南屋敷」として、それぞれの屋敷地内で検出した遺構のなかで、特筆すべきものを取りあげて説明する。また、屋敷境、遺物についても触れてみたい。

<北屋敷>

池と建物礎石 第4遺構面(江戸初期)で「堀尾采女」の屋敷に伴う大小の池跡と、その北側にあたるところで礎石列を良好な状態で検出した。礎石列からは、東西9間×南北7間の建物が想定でき、南側の礎石列は、縁側の可能性も推定された。この建物は池を鑑賞するための会所ではないかとの指摘も受けている。また、大小の池をつなぐ「鑊水」があり、それをまたぐように、渡り廊下とも思われる礎石列が南側に延びることが確認できた。渡り廊下の先には、並んだ礎石がみられ、小型の建物が存在したようである。茶室のようなものがあってもよいであろうか。なお、屋敷地の母屋(主な生活空間)は、調査区をはずれた東側に存在することが推定される。大池については、改修されて第3遺構面(江戸初期)にも存在していたことがわかっている。

石組遺構 第1遺構面(幕末)の屋敷地南西側で、乙部家に伴う石組遺構を検出した。10段の階段をもつ、内法3.7m×5.2m、深さ約2.0mの比較的規模の大きい遺構である。石組の間には目張りはなく、床面には玉砂利が敷いてあった。使用されていた石材は、ほとんどが大海崎石である。この遺構の中に、建築部材とともに幕末から明治にかけての陶磁器が大量に廃棄されていた。また、狐の土製品や石造物と一緒に出土しており、これは文献に記述が残る「乙部稲荷」の存在を証明するものである。その他、「大工 長次」と書かれた墨書の木札など、当時の工人の様子がわかる貴重な文字資料を得ることができた。

胞衣箱 平面正方形に掘られた土坑から、「明治三年庚午六月八日、亥ノ上刻誕生女子胎衣」の銘が書かれた木箱が出土した。日付から、松江藩主定安公の九女「鑑子」出生時の胞衣箱であることが判明した。廃藩置県前に松平家が一時期、乙部家に仮住いをした記録が残っており、史料の記述と合致するものである。時代的に第1遺構面(幕末)に伴う遺構であるが、第1遺構面の残存状況が非常に悪く、屋敷地の建物配置



はほとんどわからなかった。そのため、屋敷地のどの部分におさめられたものかは不明である。

鍛冶関連遺構 池跡北西にあたる部分で、第4遺構面(江戸初期)の下層から炭層の広がりを確認した。この炭層の下から、鉄滓や断面方形あるいは円形の羽口が多数出土した。また、炭層の中から鍛造剥片も採取でき、鉄材の鍛練がおこなわれていたことがわかった。おそらく、築城に関係するものか、屋敷の建設に使用する目的で鍛冶場が存在したものと推測する。

<南屋敷>

建物礎石 第4遺構面(江戸初期)で、生駒家あるいは朝日家に伴う建物の礎石列を検出した。奥行10間、間口7間以上を想定させる規模のものである。北屋敷の礎石とは異なり、根石を持つのが特徴である。建物の中心となる礎石の根石には、砂利を使用するものもみられる。また、この建物礎石の北側には東西に伸びる雨落ち溝を確認している。建物の規模・位置から、屋敷地のなかでも主要な部分であることが推測でき、おそらく母屋に相当するものと思われる。

石敷遺構 第4遺構面(江戸初期)の建物礎石の北側に位置する。南北に約3.8m、東西に約4.0mの範囲で、10cm程度の河原石を一面に敷いたものである。この石敷を取り囲むように柱穴が並んでおり、母屋の北側に掘立柱建物が存在したことを推測させる。

建物群(補足調査) 第5遺構面(江戸初期)で、2棟の建物跡を確認している。東側の建物の規模は、東西5間×南北2間で比較的小型のものである。西側建物の礎石は、抜き取られたものも多いが、東西3間×南北6間の建物が復元できるものである。

八角形木箱(補足調査) 第5遺構面(江戸初期)の調査時、調査区南側壁面を精査していたところ出土したものである。木箱の外面には「玄武」「青龍」「朱雀」「白虎」などの文字が書かれていた。昨年度、この木箱が出土した北東の位置にあたるところで、「橘 明喬」銘の祈禱具(木箱)が出土しているが、これと対になるものかもしれない。

<屋敷境>

北屋敷と南屋敷の屋敷境を示す石列溝を検出することができた。北、南の屋敷地で、それぞれが石列の改修を別の時期におこなっていることもわかっている。

また、補足調査では、この石列溝の下から素掘りの溝が検出された。このことから、城下町造成当初の屋敷境は、石列溝ではなく、素掘りの溝であったことが判明した。

以上、特筆事項のみを取り上げて紹介したが、このほかにも多くの遺構を検出している。

<遺物>

陶磁器については、北、南屋敷ともに江戸時代初期は、肥前陶器が中心で、織部、志野、中国磁器が少数使用されたようである。その後、南屋敷では、初期伊万里(肥前磁器)を使い始めるが、北屋敷ではしばらく、中国磁器を使い続けているようである。江戸時代も後半になってくると、北、南屋敷ともに肥前磁器が主流になり、さらに後になると、地元で生産された陶器をはじめ、さまざまな産地の陶磁器が入ってきていることがわかった。

土師器皿(かわらけ)についても、各遺構面を通じて出土しており、今後時代ごとの変遷が追える可能性がある。

また、主に廃棄土坑で多くの木製品が出土している。漆碗、箸、折敷、下駄、建築部材、墨書木簡などバリエーションも豊富である。

その他、獣骨、魚骨、貝、種子などの食糧残滓も出土しており、当時の食生活をうかがい知る良好な資料が得られている。

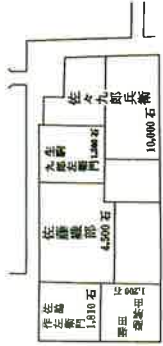
以上、今回の調査は、2つの屋敷地をまたぐ形で調査ができたことにより、屋敷境をはじめ各々の屋敷地での変遷が比較しながら追える非常に貴重な調査例となった。さらに、それらの屋敷地が、松江藩主を支えた重臣のものであることも重要である。今後、報告書の作成に入ることとなるが、詳細な検討を重ね、当時の家老屋敷の具体像を明らかにしたい。(徳永桃代)



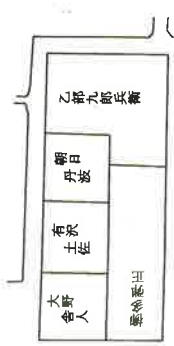
＜現在＞
(1/4000)



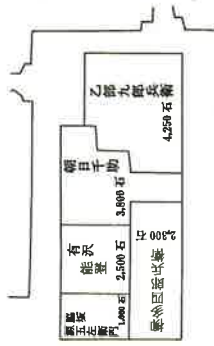
＜堀尾期＞
1620～1633年



＜京極期＞
1634～1637年



＜延享年間頃＞
1744～1748年頃



＜松平期＞
1825～51年



＜近代＞
1873年(明治6年)

「堀尾時代松江城下絵図」 「京極時代松江城下絵図」 「松江城下絵図(延享絵図)」 「松江城下町絵図(松平期)桑原文庫」 和歌山府民による「治勢台帳」と「松江町絵二分図説」からの改題

屋敷配置図



北・南屋敷第4遺構面 (江戸初期)



北屋敷 大池 (第4遺構面)



北屋敷 石組遺構 (第1遺構面)



南屋敷 第5遺構面



北屋敷 胞衣箱 (第1遺構面)



南屋敷
八角形木箱

出土した陶磁器

(中国磁器小坏、中国磁器皿、織部轆形碗、志野向付、唐津向付、唐津皿)



石台Ⅱ遺跡

本遺跡は松江市西津田に所在する。松江第五大橋道路が計画され、加えて道路の機能を補完する目的を持つ都市計画道路を計画したことに伴い、松江市教育委員会が行なった試掘調査により発見された遺跡で、「石台Ⅱ遺跡」と命名された。

周辺は大橋川によって運ばれた土砂が砂丘状に堆積したものであると考えられる。南側の丘陵部には多くの遺跡があり、本遺跡の南側に平野を南北に貫く馬橋川の河川改修の際に縄文時代から中世にかけての遺物が出土し、弥生時代の中期から後期の集落跡が確認されている「石台遺跡」が存在する。

調査は工事関係上、調査地を二分割し、平成19年度は平成19年12月25日～平成21年2月28日にかけて北側半分を、平成20年度は平成20年10月20日～平成21年11月28日かけて実施した。調査地の地盤が軟弱なため、矢板を打設しての調査となった。

調査にあわせて土壌分析を行い、その結果この付近は縄文時代後期頃から弥生時代前期頃にかけて湿地であったことや弥生時代中期以降の土層からは稲作が行われていた可能性が発見された。また土層断面からこの周辺に馬橋川の流れがあったことを示す痕跡（河川堆積層：砂層）が確認された。

調査の結果、残念ながら遺構はなく、遺物包含層のみが確認された。縄文土器や弥生土器、中世の土師質土器や木製品など広範な時期にわたる遺物が出土した。恐らくこれらの遺物は馬橋川の上流から流されてきたものと推測され、川の上流に集落があった可能性が高い。

(石川 崇)



調査地位置図



河川堆積層の跡 白く見えるのは砂



出土した縄文土器



出土した弥生土器

千酌条里制遺跡他（中殿遺跡・修理田遺跡）

1. 開発事業名 千酌地区 農業生産法人等育成緊急整備事業
2. 開発区域 松江市美保関町千酌地内 現況：水田、休耕田、畑地ほか 面積：27.3ha
3. 調査面積 なかどの中殿遺跡 約563㎡ しんて修理田遺跡 約202㎡
4. 開発事業者名 島根県松江県土整備事務所
5. 調査期間 中殿遺跡 平成20年5月1日～10月31日 修理田遺跡 11月1日～3月3日

調査対象地は、千酌地内に所在している。この地域は『出雲国風土記』に「千酌ちくみのうまや 駅」の記述があり、隠岐に渡る公設の水駅が所在したところであり、永年耕作されてきた水田の区画等にも広範囲に「条里制」の痕跡が残っていて、周知の遺跡として知られた地域である。この千酌の水田地帯に、田を区画し直すほ場整備事業が計画されたため、今回の発掘調査を実施することになった。この調査の中で「千酌ちくみのうまや 駅」推定地である「修理田遺跡」からは、遺構は検出されなかったため、「中殿遺跡」の遺構について以下に示し、遺物については両遺跡について簡単に記すこととする。

1. 主な遺構

[SB01] 山側の田に尾根に平行するように建てられた2間×3間の掘立柱建物。柱間は約2.05m～約2.35mを測る。ピットの深さは、0.2m～0.3mしかなく上面はかなり削平を受けている。検出面の遺物は、8～9世紀代であるが、ピット中の埋土から出土する土器も同時期の遺物である。

[杭列] 22本の杭列である。板材や丸木を使用している。「田の畦」を思わせる杭列である。杭列の時期は不明であるが、SB01と同レベルで、棟方向にほぼ直行するように検出されているので比較的に近い時期のものと考えられる。

[SX01] 弥生時代末～古墳時代前期の遺物を検出した加工段である。ただし、土層の堆積状況から自然川岸を加工したものとも考えられる。

2. 遺物について

「中殿遺跡」からは、弥生時代～近世までと幅広い時代の遺物が出土した。最も出土量の多いのは、8世紀～9世紀の遺物である。SX01のように加工段上で検出された弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺物もあった。

「修理田遺跡」からは、古墳時代～奈良時代の遺物が出土した。遺物量は非常に多かったが、摩滅したものがほとんどだった。また、公的な施設の存在を窺わせる遺物（須恵器）として「獣脚」1点、「托」が2点、「墨書土器」と思われるもの1点が出土している。

3. まとめ

「中殿遺跡」の調査では、8世紀～9世紀の遺物が中心に出土したことや、礫層上から2間～3間の掘立柱建物跡を検出したことで、「千酌ちくみのうまや 駅」跡の馬小屋的施設の可能性も考えられたが、建物規模などから判断すると、公的な建物の可能性は低いと思われる。

また、北側調査区の山側から、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺物を伴う加工段が検出されたが、この発見は、付近丘陵部分に同時期の集落が存在することを示している。

「修理田遺跡」の調査では、「千酌駅」推定地の一部の調査ということで、遺構の検出を期待したが、掘り進めるうち遺物は出土するものの、摩滅したものがほとんどであることや、堆積層に大小の礫が多量に含まれていることから、自然災害的な攪乱を受けているという印象を強く受けた。ただし、遺物量の多さから考えると、周辺に遺構があるか若しくは、あった可能性が高い。（錦織慶樹）



中殿遺跡・修理田遺跡位置図



SB01 (北東から南西を撮影)



SX01加工段 (南から北を撮影)



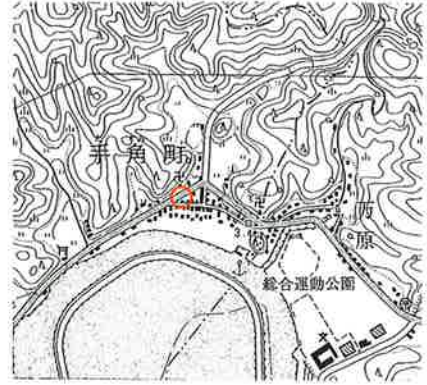
左から托、獣脚、墨書土器？



「修理田遺跡」遠景 (西から東を撮影)

寺ノ脇遺跡

- 【所在地】 松江市手角町字町並72-3
【調査原因】 道路整備
(国道431号 手角工区特定交通安全施設整備工事)
【調査面積】 調査対象面積 91㎡
調査面積 78㎡
【調査期間】 平成20年9月8日～平成20年11月17日



寺ノ脇遺跡は、島根半島北東端の中海沿岸に位置し、丘陵の谷間が中海沿岸に向かって開けたところ、谷口に存在する。調査は、調査区をⅠ区とⅡ区に分割しておこなうこととなり、Ⅰ区の調査は平成19年度に終了している。Ⅱ区の調査を上記の期間で実施した。

調査の結果、遺構面2面を検出した。第1遺構面（標高2.0～2.4m）から、多数のピットと土坑1基を検出した。ピット内からは縄文時代から近世の土器が出土し、また、遺構の基盤層からも陶磁器が出土していることから、近世以降の遺構と考えられた。

第2遺構面（標高1.4～1.8m）からは多数のピットや土坑、溝状遺構を検出した。ピットや土坑内からは縄文時代から古墳時代後期の土器が出土し、覆土からも同時期の遺物が出土していることから、古墳時代後期頃の遺構面と考えられた。

本調査区の土層はすべて遺物包含層で、多くの土器や石器などが出土した。遺物は縄文時代から現代まで幅広く出土し、古墳時代前期の土器が一番多くみられた。下層にいくほど縄文土器の割合が高く、なかでも突帯文をもつ晩期の土器が多かった。昭和43～44年かけておこなわれた寺ノ脇遺跡発掘調査においても縄文土器が出土し、周辺に縄文時代の遺構の存在を窺わせた。今回の調査で住居跡などの遺構は確認できなかったが、中海周辺、特に当地域の人々の生活を知るうえで良い資料となったと考えられる。

(廣瀨貴子)



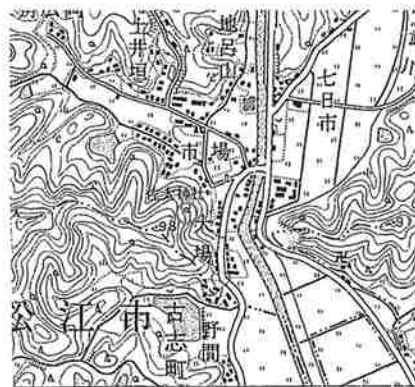
第1遺構面



第2遺構面

佐太前遺跡（G区）

- 【所在地】 松江市佐陀宮内町
【調査原因】 広岡川改修工事
【調査面積】 調査面積 436㎡
【調査期間】 平成21年2月19日～平成21年6月24日



広岡川改修工事に伴う佐太前遺跡の発掘調査は平成19年度（A・B・C・D区）・平成20年度（G・H区）を行なってきた。H区に関しては平成20年度内に調査を終了したものの、G区に関しては平成20年度から21年度にかけて調査を実施した。

このG調査区は佐太神社の社前に位置し、現状ではアスファルト道路と、その周辺の盛土・畑部分に該当する。調査区内では、道路部分など、厚い部分で1.4mもの盛土が堆積しているが、それより下、特に調査区の南半分では良好な中・近世の遺構と、黒色の弥生～古墳時代の包含層が堆積していた。

盛土・旧耕作土直下の茶褐色砂質土で検出した中・近世の遺構面では400に及ぶ多数の遺構を検出したが、柱痕の残存するピットなども多く、現場調査時に最低三棟の掘立柱建物を復元した。この中世～近世の遺構面と、その包含層から土師質土器（柱状高台を含む）、土師皿、瓦、輸入銅銭、下駄、漆器椀などが出土する一方、陶器・磁器の数は極めて少ない。

その下の黒色包含層で検出した弥生～古墳時代の遺構面でも500に及ぶピット、土壌が検出された。この遺構面から掘立柱建物4棟、および竪穴住居跡の周溝？と思われる遺構を検出した。

以上、今回の発掘調査で弥生時代～古墳時代の遺構面と中世～近世の遺構面の2面の面的調査を実施した。弥生時代～古墳時代の遺構面ではピットや土抗などの多数の遺構を検出することができた。このように密集して重複する遺構のあり方は、最近の佐太前遺跡の調査や、昭和60年代の鹿島町歴史民俗資料館地区での調査地においても同様であったが、今次調査では住居跡跡の復元を行うことができ、これまで不明瞭であった佐太前遺跡の集落の一部を確認するという大きな成果を得ることができた。

また、中世～近世の遺構面では、佐太神社の目前で建物跡を検出しており、神社（神官屋敷など）と関連するであろうと考えられる。佐太神社は出雲二ノ宮として著名な神社であるが、文献資料が少なく、今回のような考古学的資料の蓄積は地域の歴史を復元するために極めて有意義であると考えられる。

（藤原 哲）



出土した弥生前期の土器



弥生時代後期の土壙

戸崎遺跡

所在地 松江市上佐陀町529-2、530、531
遺跡番号 D-0154
調査原因 野間地区ため池等整備事業
調査面積 290㎡
調査期間 平成20年6月1日～平成20年7月25日



戸崎遺跡は遺構面2面が存在した。

地山直上の遺構面（第2面）では、弥生時代中期末から後期初頭の遺物を伴う円形竪穴住居跡のほか、弥生時代中期から古墳時代前期末までの遺物を伴うピット群を検出した。

古墳時代中期以降になると人々はこの地を去り、遺跡はゆっくりと自然堆積層の下に埋もれている。堆積層の中に中世の土器が少量含まれていたことから、居住地は北側丘陵の標高が高い場所に移っていった可能性も考えられる。

江戸時代に入ると、またここで人々が活動を開始している。堆積層の上面から多数の土坑やピットを検出した（第1面）。陶磁器類など生活に密着にした遺物の出土量が少なかったことから、居住地の中心部からは若干離れた場所であったと思われる。

(江川幸子)



戸崎遺跡調査風景（第2面）

能登堀遺跡

平成19年度調査では、能登堀遺跡の範囲の広がりや遺跡の内容を確認することが出来た。時期的には古代末から中世、古墳時代後期の2時期に遺物のピークがあり、当時の人々はその時期に活発に当地で活動していたことを物語っている。特に古代末から中世にかけての遺物として中国製の輸入磁器が出土したことと合わせて、発見例の少ない中世の石製硯が出土したことは、この付近に文字の書ける有識者がいた可能性を示唆する。また、調査地南側の緩斜面にあると考えられる能登堀遺跡の中核部分の様相を、そこからの流入と考えられる包含層出土遺物の様子から伺うこともできた。古墳時代後期には祭祀跡が行われたと考えられる溝状遺構も検出され、今後遺物の精査等により当時の祭祀風景の復元を期待できる調査例となった。ただ、地滑り地帯という特殊な立地条件が遺構の理解を困難にしたこともあり、溝状遺構の切り合い等が確認できなかった。



平成20年調査地は、平成19年度調査で検出されたV字形の谷上部の起点に当たる地点と考えられるが、地滑りが激しく、また、検出された地山面には遺構・遺物は皆無であり、そのほかの場所でも生活の痕跡を検出することは出来なかった。しかし、遺物包含層が数層検出されたことから、近傍に主たる生活の場が存在したことを伺わせる。

平成19～20年に至る2カ年の調査によって、能登堀遺跡の範囲の北限がほぼ確認された。出土遺物の状況からは、古墳時代から中世にいたる長い期間に、幾度か近傍で活発な生活が営まれていたことを確認することが出来た。今後の調査においても貴重な史料となるものである。(中尾秀信)

